理研会報

行政局　8内
研究　4枚
科学　9町小
理務幸
研市田
教、
発印事成成

第二十三回　千教研理科教育部会研究発表大会　君津大会報告

研究発表大会に参加して

内野小学校　寺内　義雄

この大会は毎年開催地が変わり開催の支部は参加者が良い研究ができるように多大な配慮をして下さる。今年の君津支部の研究部も会場の準備・授業への協力・地域の自然の展示等最大の準備をして下さった。感謝しながら当地を理解するのも楽しみの一つである。

君津市は新日鉄を中心に急速に開発された東京湾地区と多くの自然を残したリゾート地の内陸部とからなり、会場はその中間に位置する周南（すなみ）小・中学校で自然環境に恵まれた住宅地であった。会場は鉄鋼のパンフレット見られず、全体会でも鉄の話も少なかった。華やかな大会の中にも鉄冷えの空気が感じられた。

講演は、『東京湾に住む生物』ということで海の中の生物のスライドをたくさん見せていただき『東京湾はまだ生きている』むしろ回復していると感じた。東京湾への関心は強い。鉄冷えの進む同地が東京湾横断橋の完成により一躍首都圏に繰こまれる再発展に夢をかけ熱い眼で東京湾を見ているようであった。

地学部門へ参加したので、大体の授業（中一）を見せていただいた。OHP・パソコン・四方の壁にはった星座を使った年周運動の授業を楽しくやってた。多くの教育機器を使った意欲的な研究授業であった。

研究発表は、各支部から選ばれて来た人たちであるだけに、実践の成果・研究への情熱・内容のまとめ方ともに立派であった。本研究部の林田先生（八街中）の発表も好評であった。

過密な日程の中、発表時間が短かくて提案者には気の毒であった。それだけに内容の濃い大会であった。

来年はぜひ本研究部の多くの先生方に参加して欲しいものである。研究発表大会は、県下の理科の先生方の祭典である。

中学校地学部門に参加して

八街中学校　林田　孝二

さる十一月十九日（水）マザー牧場方面の君津市立周南（すなみ）中にて表記の大会が行なわれた。主題は、『学習意欲を開発する指導法の研究』であった。昭和五十七年～五十九年度にかけては、学校行事を中心に生徒の活力を引き出す研究が行なわれていた。そのあとを受けて、生徒の意欲（活力）を教科学習に転移させるにはという観点で本主題に全校あげて取り組んでいた。理科の発表というよりは、学校をあげての発表の印象が強かった。

理科では、『意識して』『自然に働きかける態度』の育成を目ざして』をサブテーマとして研究していた。その中で態度の要素として①情的態度（感情）好き～嫌いを両極とする五段階②意的態度（意志）やる気～やる気なしを両極とする③知的態度（価値）必要～不必要を両極とする。の三つに分けていたこと。『生活化』は、生活生存の視点に結び付けていく学力（知識・技能・態度）を考え、授業の中でその示唆を与えていくこととらえていた。それらによってテーマにせまり、さきの①～③の態度・意欲を高めていこうというものであった。まだ、研究は始まったばかり、これからという印象を受けた。

さて、八街町では『八街南中』開校に伴う学区再編成がこの四月に行なわれる。北部地域が八街中、八街駅周辺の中部地域が八街中央中に、南部地域が『八街南中』になる。規模は、八街中（七、七、七）、八街中央中（八、九、八）八街南中（四、四、四）になるようである。現在の私の学級には来年度の三つの中学校の『三年生』がいる。また、八街中央中にも三つの中学校の生徒がいる。現在進行中の近況話題で筆を置く。

小学校化学部門に参加して

白井第三小学校　平野　敏郎

昨年十一月十九日、千教研君津大会が行なわれた。小中領域別に八つの分科会が開かれ、小学校化学分野では、四つの提案がなされた。その一つに私は、『よくわかる実験観察の工夫』と題し、六年教材である『ほのおを調べる』の単元を通した実験データや自作教具、そしてその作製方法等を提案した。（印教研において三部会より提案したもの。）

大要として、児童にとって燃焼という現象を理解させようとするとき、物質が固体・液体・気体の三態に変わる過程が、直接目に見えないだけに理解しにくい面が多い。とりわけ蝋や木片の燃焼では日常の経験から気体よりも固体に目がいってしまう傾向が強い。そこで児童が現象をはっきりととらえられるとともに、手軽に準備でき、また安全に操作できる器具を使うことを主眼において研究を進めたものである。

分科会の中では、教具作製上の留意点に質疑が集中し、特に木片乾留実験に用いるガラス蓋と、大きな炎を見せるための蝋そくの作製法に関心が集まった。そこでいくつかの問題点をかかげながら多くの学校で実践していただければと説明をつけ加えた。

他支部からは、市川支部より、『自ら問題を発見するような事象の工夫』東総支部より『水よう液の学習についての系統的な指導』長生支部より『児童一人ひとりがわかる、できるをめざした理科指導』の提案が多くの実践例とともにだされ、日頃の実践に根付いた活発な質疑応答が行なわれた。そして、レベルの高さを強く感じてきた。

ここで学んだことを今後さらにいかし、研修・研究を深めていきたいと思う。

第三十六次　千葉県教育研究集会　千葉大会報告

小学校分科会に参加して

四街道小学校　貝塚　健太郎

分科会は、二本の柱に沿って行なわれた。

『よくわかり、児童に楽しさを抱かせる指導法は、どうあるべきか』

主体的学習、自首的創造的な学習のあり方、学習への興味のもたせ方、喜びのある実験観察の方法等の提案があり、我々の『一人ひとりが気付き考える力を育てるための実験観察の工夫』もこの主題に沿って行なった。

『地域の自然をふまえた正しい自然観を育てる理科教育はどうあるべきか』については、一人ひとりを生かす理科指導について提案が行なわれた。

最後に助言者の先生より、提案には主張が必要であること、つまり誰にも何を研究しているか、はっきりわかるようでなくてはならないこと、理論だけでなく実践が伴っていなくてはならないこと等の指導があった。この点では我々の研究は評価を得たものと考える。

中学校分科会に参加して

旭中学校　鈴木　豪

全国教研に進んだ千葉市グループの発表は、天文分野についてのものであった。教具の工夫に合わせて天体学習の年間計画を発表したものである。その他のグループの発表は、ワークシートに関するもの、ビデオを利用した指導等があり、我々の発表（化学分野－実験開発を中心に発表）を含め実演による発表が多く見られた。

県教研に参加して思ったことは、研究への取り組みはできるだけ大胆に、そして実践において得られたデータは、できるだけ蓄積し、細かく分析するということである。

※原稿の一部を省略させて頂きました